# 矢板市林業・木材産業成長化推進協議会 主催 林業の成長産業化に向けたシンポジウム 『 林大生 は米業界の何に不安を感じている? 』

林業大学校生を対象としたアンケート調査・考察

令和 4 年 1 月 29 日 FOREST MEDIA WORKS Inc.インターン 宇都宮大学学生チーム 倉岡拓海 伊藤真奈 濱田哲典 渡部逸晴

# I. 調査の実施方法

### 1. 調査目的

我が国の森林面積のうち約4割に相当する1,020万haは人工林で構成されており、その半数が一般的な主伐期である50年生を超え、本格的な利用期を迎えている。一方で、現場業務に従事する林業従事者の数は長期的に減少傾向で推移しており、今後、林業への雇用促進が一層求められる。

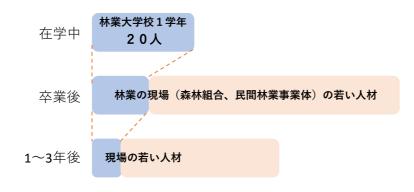
全国各地で森林技術者の育成を図り、林業大学校の設立が進められている。しかし、林業 大学校の卒業後に森林技術者として現場業務に従事し続ける生徒、あるいは在学中に公務 員志望など現場業務を希望しない生徒が多いと見受けられる。

そこで、全国の林業大学校生を対象にアンケート調査を行い、林業への就業意欲を把握し、 林業の雇用促進のための基礎的知見とする。

# 林業大学校 約20の都道府県で設立が進む 森林林業の即戦力となる人材の養成 林業事業体の経営力の向上を支える人材の育成



# 現状





- 実際に林業の現場において、林業大学校生が増えているの事実
- 今後も増えていくだろう、、
- どんな理由で林業の現場を選択しない のか?
- ◆ 林業の現場を選択するが、どういった不安を抱えているのか?

# 林業業界

林業事業体 林業大学校 林業関係者

# 2. 調査方法

アンケート調査:Google フォームを使用し、オンラインアンケートとした。

	対象林業大学校		回答数
北海道 北海道	<b></b> 立北の森づくり専門学院	2年制	2
東北青い森	<b>茶林業アカデミー</b>	1年制	1
いわて	<b>工林業アカデミー</b>	1年制	0
秋田林	業大学校	2年制	10
山形県	立農林大学校	2年制	12
関東甲信 群馬県	立農林大学校	2年制	2
長野県	ł 林業大学校	2年制	1
中部 <b>岐阜県</b>	<b>皇立森林文化アカデミー(森と木のエンジニア学科)</b>	2年制	15
静岡県	R立農林環境専門職大学短期大学部	2年制	0
近畿 京都府	f立林業大学校	2年制	23
奈良フ	'ォレストアカデミー(森林作業員学科)	1年制	4
兵庫県	<b>皇立森林大学校</b>	2年制	23
中国にちな	たの中国山地林業アカデミー	1年制	1
島根県	<b>皇立農林大学校(森林技術コース)</b>	2年制	0
島根県	<b>皇立農林大学校(早期養成コース)</b>	1年制	0
四国高知県	· 全国	1年制	2
九州 おおい	た林業アカデミー	1年制	0
くまも	と林業大学校(長期課程)	1年制	4
みやさ	「き林業大学校(長期課程)	1年制	0
林業大	学校卒業生		5
不明			1
合計			106

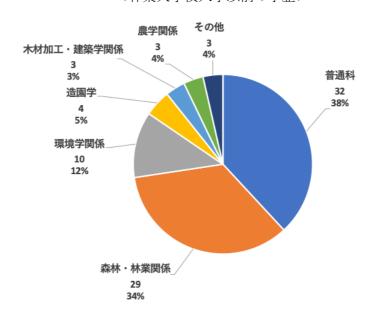
全国で18都道府県の林業 大学校を対象に調査

106名からの回答

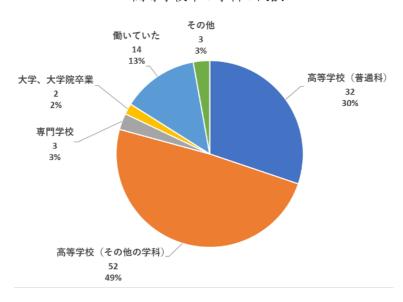
# II. アンケート結果と考察

# 1. 林業大学校以前の学歴

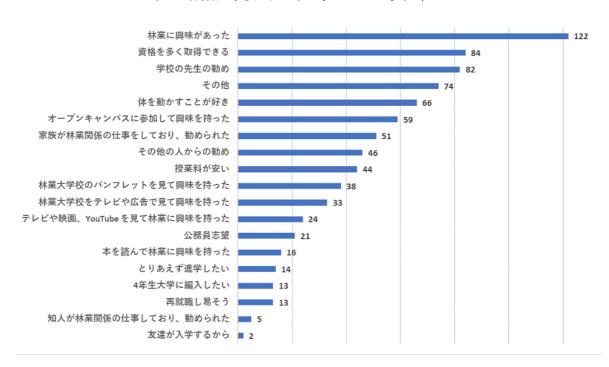
<林業大学校入学以前の学歴>



## <高等学校卒の学科の内訳>



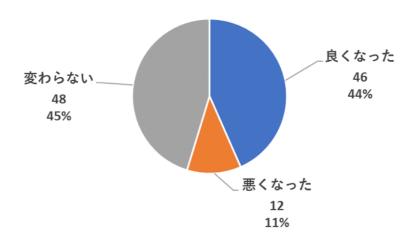
### <どうして林業大学校に入ろうと考えましたか。(上位3つ>



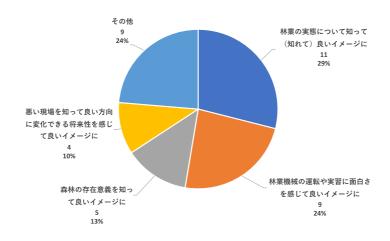
- ・ 高卒生の入学では 38%が普通科出身であった。森林・林業関係の学科については 34%。
  - ▶ 林業大学校側としては、普通科にも営業を行うことで入学希望者の増加につながる可能性が高い。
- ・ 入学のきっかけについては、上位3位に「学校の先生の勧め」。
  - ▶ 林業大学校の募集の営業としては、学生への直接的な営業だけでなく、高等学校の先生にも林業大学校の存在をアピールする必要が有効だと考えられる。
  - ▶ ちなみ倉岡は普通科の高等学校出身であり、林業大学校への進学を「考え直せ」 と言われた過去がある。
- メディアや本からの影響を受けて林大に進学する人は少ない。
  - ▶ 想像以上に少なかった。一方で、Wood Job!!の影響は多少ある。 林業業界は、YouTube 等のメディアの活用が下手なのではないかと考えられた。

# 2. 入学前後で林業のイメージの変化

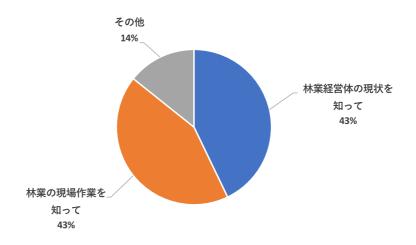
<林業大学校で学んでみて、林業のイメージに変化はありましたか。>



<良いイメージに変化>



<悪いイメージに変化>



- イメージが変わらない学生が45%と最も多い。
- ・ イメージが良くなった学生も 44%だった。
- ・ 大学校の授業において林業の実態を知って林業が良いイメージに変化した学生が 29%と多かった。
  - ▶ イメージがよくなった学生も予想以上に多い。
  - ▶ 世の中に出回っている一般人向けの林業のイメージと実際に働いた時の感覚の 差を考えると、イメージが悪くなってもおかしくないにもかかわらず、イメージがよく なったと答えている人が一定数いることは不思議である。林業大学校が良い面だ けしか教えていないのではないかと感じられた。

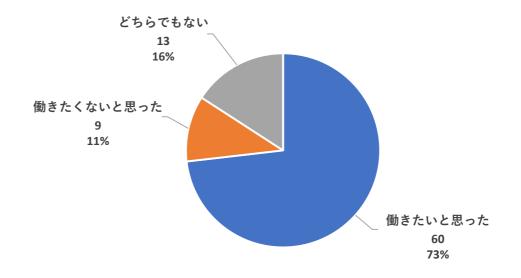
- ・ 実習で、伐倒や高性能林業機械を運転することが楽しかったり、やりがいを感じたりして 良いイメージに変化した学生が 24%。
  - ▶ 実際に、就職して数年は高性能林業機械を運転できる機会は少なく、1年目は伐倒もできず雑用作業(作業補助)をさせられることも当然にあり得る。
  - ▶ 就職した際には、必ず「下積み」があることを知らずに就職してしまうと、林大で見たことと事業体での実際とのギャップにより、やめてしまうことにつながりやすいと考えられる。(このような話をよく耳にする)
  - ▶ 林業の現場作業や森林の公益的意義などについては教えるが、林業事業体の組織経営の実態についてはあまり触れていないのではないか。
  - ▶ 林業業界の現状を知っている学生が少なく、リアルな現状を知らずに就職している可能性がある。
- ・ イメージが悪くなった理由としては、林業事業体の経営(低賃金等)と林業の現場作業 (危険、重労働等)の実態を知ったという意見が多かった。
- ・ イメージが悪くなった学生の 58%は高等学校卒の学生であり、42%は大学卒以上、または社会人経験者であった。
  - ▶ 自分が将来携わる業界に対して関心があまりないように感じる。一方で、社会人経験のある学生や大学卒の学生は多少関心があることに加え、業界や会社の見方を理解しているように感じる。

# 3. インターンシップについて

<在学中のインターンシップはどのような会社に行きましたか(複数選択可)>



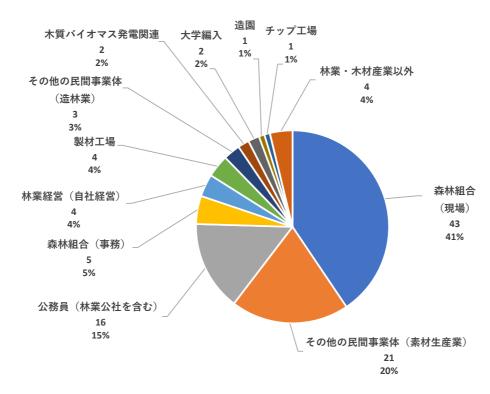
<インターンシップで体験して林業の現場【森林組合(現場)、 民間事業体(素材生産業、造林業)】で働きたいと思いましたか。>



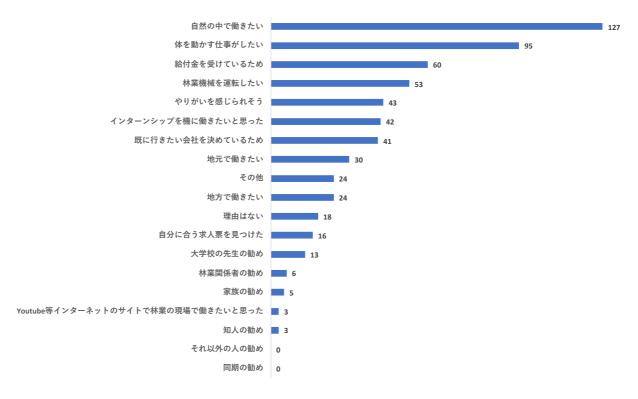
- ・ ほとんどの人が現場(森林組合の現場、素材生産業、造林業)をインターンシップで経験している。
- ・ インターンシップに行った人で、73%が林業現場【森林組合(現場)、民間事業体(素材 生産業、造林業)】で働きたいと回答。
  - ▶ 働きたいと思った理由については、「自然の中で働けるから」、「現場作業にやりがいを感じるから」、「林業機械を運転したいから」などが多く、その会社に入社したいという思いより、現場で働ければ良いと言った軽い考えの人が多い。
- ・ インターンシップに行った人で、16%がどちらでもないと回答しており、1学年(約20人) に3~4人はあまり考えずにインターンシップに行っている。
- ・ 現場で働きたくないと回答した人は、給料面、安全面、雇用面での理由がほとんどであった。
- ・ 後半に詳しく触れるが、就職先を決定づける上で重要視するものについて、「インターンシップ等の実際の体験」を選ぶ人が最も多かった。
  - ▶ できれば、あまり評判の良くない事業体に林大生が就職することは避けてほしいという気持ちがある。
  - ▶ 就職後やめない人を増やすためには、インターンシップでのミスマッチを減らすことが必要。インターンシップに参加するだけで、その会社のことをよく知らずに就職してしまうことが、後々問題が発生させているのではないか。
  - ➤ インターンシップの段階で、林業大学校は学生に良い会社の見方やインターン湿布での情報収集の方法、就職会社の選び方を教える必要がある。
  - ▶ 他産業のインターンシップでは、良い企業には募集が集中することを考えれば、 良い会社に就職希望者が集まるようになってくれば、林業事業体は雇用の改善な どへの努力も必要となり、改善をした会社に人が集まるようになるという相乗効果が 期待できるのではないかと考えられる。
  - ▶ 学生がインターンシップ先を選ぶ際には、距離の問題、交通費の問題などにより、 選択肢があるようで実はなく、学校から近場の事業体に行くしかないと聞く。できれば、学生が希望するインターン先に行ってもらいたい。
  - ▶ 林大は、インターンシップの受け入れをしてくれる事業体には、学生に対して説明 会をしてもらうような仕組みを設け、学生が選べるようにしてあげてほしい。(他産業 のように)

# 4. 卒業後の進路について

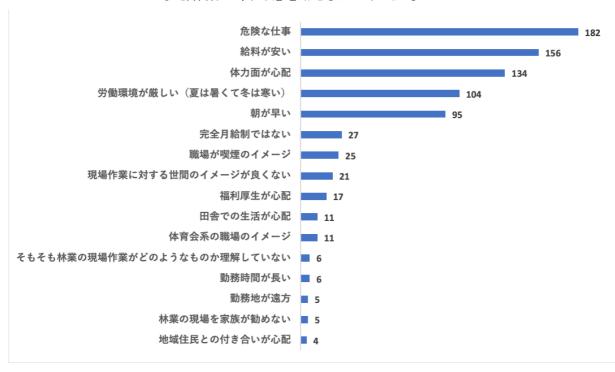
<現在考えている卒業後の進路を教えてください。>



<林業の現場【森林組合(現場)、民間事業体(素材生産業、造林業)】を希望した理由>



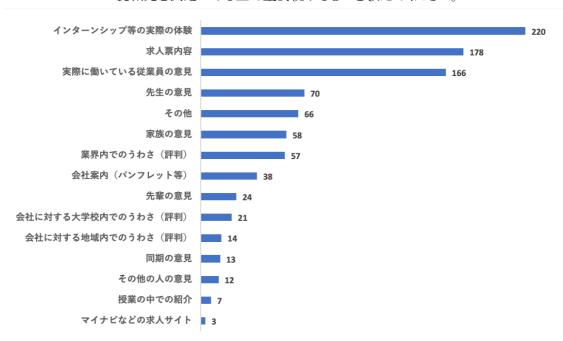
## <現場作業に対する懸念点を教えてください。>



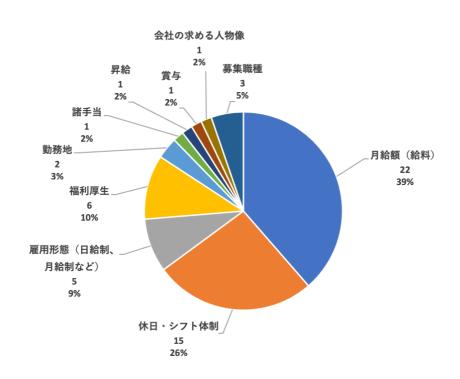
- ・ 林業の現場【森林組合(現場)、民間事業体(素材生産業、造林業)】を卒業後の就職 先と考えている人は 64%であった。 続いて公務員の 15%。
  - ▶ 約4割は林業の現場以外を希望している現状。
- ・「自然の中で働きたい」、「体を動かす仕事がしたい」という理由で林業の現場を希望する人が多かった。
  - ▶ 就職する会社や業界を心配している意見が予想以上に少なく、将来のことなどを 考えずに軽い気持ちで就職しているということが示唆される。
- ・ 安全面や給料面を現場作用の懸念点と上げる人が多い。
- ・「体力が心配」、「現場作業の技術が難しい」、「労働環境が厳しい」、「朝が早い」などの 自分自身の問題を懸念点に上げる人も多かった。
- ・ 林業の現場を希望しない人は、安定した職と給料を求めている人が多かった。
  - ▶ 就職する会社をあまり知らず(知る機会がない、知る重要性を分かっていない)に 就職してしまっていることが示唆されるため、林業大学校のカリキュラムとして就職 活動について学ぶ機会が必要ではないか。
  - ▶ 人生がかかっている就職活動において、「みんなどこでもいいので林業事業体に 就職しましょう」ではなく「将来性があり人を育ててくれる事業体に就職しましょう」に 変えていく必要がある。
  - ▶ 林業事業体は、学生は林業の現場に対して、安全面や給料面で不安視している という現実を受け止め、より選ばれる会社にする努力が必要。
  - ▶ 林業業界について、組織に所属して働くことについてあまり理解できていない学生が就職している現状であることが想像できる。このような場合、受け入れる側の林業事業体としては、本当に採用すべき人材あるかを適切に判断する必要がある。そうでないと、事業体側も採用された学生も不幸になる。一般の会社のように性格診断やSPI(能力テスト)を活用してはどうか。

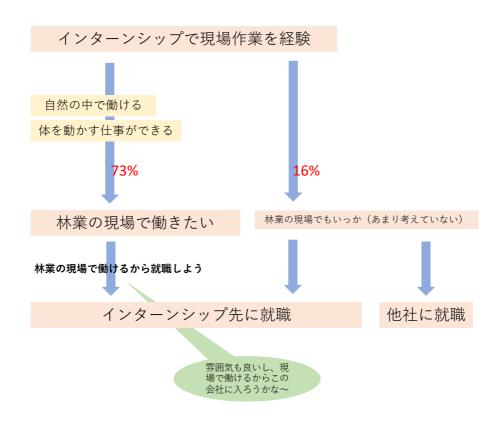
## 5. 就職先を決定づける上で重要視するもの

<就職先を決定づける上で重要視するものを教えてください。>



<就職先を決定づける上で重要視するものを教えてください。>





- ・ インターンシップ等の実際の体験により就職先を決定している場合が多い。
  - ▶ 他社をあまり知らないままに就職しているケースが多い可能性が示唆される。
- ・ 求人票の内容を重要視している人も多いが求人票の内容については、月給額(給料) と休日・シフト体制を重要としている人が多い。
  - ▶ 雇用形態(給与制度)や福利厚生については、あまり重要視していなかった。
  - → 一般的な産業の就職からすれば、雇用形態(給与制度)が最も重要なはずだと考えられる。

## III. まとめ

全国で林業大学校の設立が進み、林業の現場で働く若い人材が増えている。しかし、林業大学校の教育方針として「林業の即戦力となる人材を養成」、「林業事業体の経営力の向上を支える人材の養成」を掲げているが、実際に方針通りの人材が養成されていない現状がある。

本調査でも就職先として林業の現場を希望する人は全体の 6 割であった。4 割の人が安定した 給料と職を求めて公務員等の林業の現場以外を希望していることがわかった。この結果について、 林業事業体は現実を受け止め雇用環境を改善する必要がある。また、「自然の中で働きたい」、「体を動かす仕事がしたい」という理由で林業の現場を希望する学生が多い結果となった。一方で、 就職する会社や業界を心配している意見が予想以上に少なく、「現場で働ければ良い」といった軽い気持ちで就職している。そのため、就職する会社をあまり知らず(知る機会がない、知る重要性を分かっていない)に就職してしまっていることが示唆される。そこで、林業大学校のカリキュラムとして就職活動について学ぶ機会が必要である。また、人生がかかっている就職活動において、「みんなどこでもいいので林業事業体に就職しましょう」ではなく「将来性があり人を育ててくれる事業体に就職しましょう」に変えていくことも必要ではないか。

林業大学校の教育が変わることで、林業事業体側に危機感や競争意識が生まれ、雇用環境を 改善するきっかけになると考えられる。実際に、改善をした会社に人が集まるようになるという相乗 効果が期待できるのではないか。

一方、受け入れる側の林業事業体としては、組織に所属して働くことについてあまり理解できていない学生が就職している現状であるため、本当に採用すべき人材であるかを適切に判断する必要がある。組織に必要な人材を採用することで、会社の業績アップにもつながるのではないか。

最後に、林業大学校は生徒の能力や技術の向上だけではなく、生徒の「幸せ」を追求できる教育機関である必要がる。また、生徒を受け入れる林業事業体としては、会社の成功だけではなく、従業員の「幸せ」を追求する存在であるべきではないかと考える。

以上